

吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 3

立風書房

太宰	治
堀口	大學
丸谷	才一
筒井	康隆
遠藤	周作
田辺	聖子
山田	風太郎
佐藤	惣之助
源氏	鶏太
木山	捷平
室生	犀星



吉行淳之介・丸谷才一・開高 健＝編集

現代日本のユーモア文学 **3**



立風書房

現代日本のユーモア文学
第三集



1980年11月30日 第1刷発行

定価 1,000円

現代日本のユーモア文学 3

編者 吉行淳之介／丸谷才一／開高健

発行者 下野博

発行所 立風書房

東京都品川区東五反田3-6-18

郵便番号141 振替/東京5-74493

電話/東京(03)447-1191(代表)

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社難波製本

0393-R5903-8909

現代日本のユーモア文学 第三集目次

太宰 治

ロマネスク……………6

親友交歓……………29

堀口 大學

人魚……………52

数へうた……………54

丸谷 才一

思想と無思想の間……………58

筒井 康隆

やぶれかぶれのオロ氏……………134

最高級有機質肥料……………150

遠藤 周作

初春夢の宝船……………166

扮装する男……………189

田辺聖子

種貸さん……………204

山田風太郎

甲子夜話の忍者……………226

佐藤惣之助

西遊記の一節……………240

源氏鶏太

たばこ娘……………244

木山捷平

尋三の春……………262

室生犀星

鮎の子……………282

装幀 山藤章二
カバー構成 池上幸男

太宰
治

ロマネスク
親友交歓

ロマネスク

仙術太郎

むかし津輕の國、神棚^{かなぎ}木村に鍬形惣助といふ庄屋がゐた。四十九歳で、はじめに一子を得た。男の子であつた。太郎と名づけた。生れるとすぐ大きいあくびをした。惣助はそのあくびの大きすぎるのを氣に病み、祝辭を述べにやつて來る親戚の者たちへ肩身のせまい思ひをした。惣助の懸念はそろそろと的中しはじめた。太郎は母者人の乳房にもみづからすすんでしやぶりつくやうなことはなく、母者人のふところの中にゐて口をたいぎさうにあけたまま乳房の口への接觸をいつまでも待つてゐた。張子の虎をあてがはれてもそれをいぢくりまはすことはなく、ゆらゆら動く虎の頭を退屈さうに眺めてゐるだけであつた。朝、眼をさましてからもあわて寢床から這ひ出すやうなことはなく、二時間ほどは眼をつぶつて眠つたふりをしてゐるのである。かるがるしきからだの仕草をきらふ精神を持つてゐたのであつた。三歳のとき、鳥渡した事件を起し、その事件のお蔭で鍬形太郎の名前が村のひとたちのあひだに少しひろまつた。それは新聞の事件でないゆゑ、それだけほんたうの事件であつた。太郎がどこまでも歩いたのである。

春のはじめのことであつた。夜、太郎は母者人のふところから音もたてずにころがり出た。ころこ

ると土間へころげ落ち、それから戸外へまろび出た。戸外へ出てから、しやんと立ちあがつたのである。惣助も、また母者人も、それを知らずに眠つてゐた。

満月が太郎のすぐ額のうへに浮んでゐた。満月の輪廓はにじんてゐた。めだかの模様の襦袢に慈姑の模様の綿入れ胴衣を重ねて着てゐる太郎は、はだしのままで村の馬糞だらけの砂利道を東へ歩いた。ねむたげに眼を半分とぢて小さい息をせはしなく吐きながら歩いた。

翌る朝、村は騒動であつた。三歳の太郎が村からたつぷり一里もはなれてゐる湯流山ゆながれやまの、林檎畑のまんまんなかでこともなげに寝込んでゐたからであつた。湯流山は氷のかけらが溶けかけてゐるやうな形で、峯には三つのなだらかな起伏があり西端は流れたやうにゆるやかな傾斜をなしてゐた。百米くらゐの高さであつた。太郎がどうしてそんな山の中にまで行き着けたのか、その譯は不明であつた。いや、太郎がひとりで登つていつたにちがひないのだ。けれどもなぜ登つていつたのかその譯がわからなかつた。

発見者である蕨取りの娘の手籠にいられ、ゆられゆられしながら太郎は村へ歸つて來た。手籠のなかを覗いてみた村のひとたちは皆、眉のあひだに黒い油ぎつた皺をよせて、天狗、天狗とうなづき合つた。惣助はわが子の無事である姿を見て、これは、これは、と言つた。困つたとも言へなかつたし、よかつたとも言へなかつた。母者人はそんなに取り亂してゐなかつた。太郎を抱きあげ、蕨取りの娘の手籠には太郎のかはりに手拭地を一反いれてやつて、それから土間へ大きな盥を持ち出しお湯をなみなみといれ、太郎のからだを靜かに洗つた。太郎のからだはちつとも汚れてゐなかつた。丸々と白くふとつてゐた。惣助は盥のまはりをはげしくうろついて歩き、たうとう盥に蹴躓いて盥のお湯を土間いちめんにおびたしくぶちまけ母者人に叱られた。惣助はそれでも盥の傍から離れず母者人の肩越しに太郎の顔を覗き、太郎、なに見た、太郎、なに見た、と言ひつづけた。太郎はあくびをい

くつもいくつもしてからタアナカムダアチナエといふかたことを叫んだ。

惣助は夜、寝てからやつとこのかたこの意味をさとつた。たみのかまどにはにぎはひにけり。發見！ 惣助は寝たままびしやつと膝頭を打たうとしたが、重い掛蒲團に邪魔され、臍のあたりを打つて痛い思ひをした。惣助は考へる。庄屋のせがれは庄屋の親だわ。三歳にしてもうはや民のかまどに心をつかふ。あら有難の光明や。この子は湯流山のいただきから神柳木村の朝の景色を見おろしたにちがひない。そのとき家々のかまどから立ちのぼる煙は、はやはやとにぎはつてゐたとな。あら殊勝の超世の本願や。この子はなんと授かりものぢや。御大切にしなければ。惣助はそつと起きあがり、腕をのばして隣りの床にひとりで寝てゐる太郎の掛蒲團をていねいに直してやつた。それからもつと腕をのばしてそのまた隣りの床に寝てゐる母者人の掛蒲團を少しばかり亂暴に直してやつた。母者人は寢相がわるかつた。惣助は母者人の寢相を見ないやうにして、わざと顔をきつくそむけながら呟いた。これは太郎の産みの親ぢや。御大切にしなければ。

太郎の豫言は當つた。そのとしの春には村のことごとく的林檎畑にすばらしく大きい薄紅の花が咲きそろひ、十里はなれた御城下町にまで匂ひを送つた。秋にはもつとよいことが起つた。林檎の果實が手毬くらゐに大きく珊瑚くらゐに赤く、桐の實みたいに鈴成りに成つたのである。こころみにそのひとつをちぎりとり齒にあてると、果實の肉がはち切れるほど水氣を持つてゐることとて齒をあてたとたんにぼんと音高く割れ冷い水がほとぼしり出て鼻から頬までびしよ濡れにしてしまふほどであつた。あくるとしの元旦には、もつとめでたいことが起つた。千羽の鶴が東の空から飛來し、村のひとたちが、あれよ、あれよと口々に騒ぎたててゐるまに、千羽の鶴は元旦の靑空の中をゆつたりと泳ぎまはりやがて西のかたに飛び去つた。そのとしの秋にもまた稻の穂に穂がみのり林檎も前年に負けずに枝のたをたをするほどかたまつて結實したのである。村はうるほひはじめた。惣助は豫言者として

の太郎の能力をしかと信じた。けれどもそれを村のひとたちに言ひふらしてあることは控へてゐた。それは親馬鹿といふ嘲笑を得たくない心からであらうか。ひよつとすると何かもつと輕はずみな、ひとまうけしようといふ下心からであつたかも知れぬ。

幼いころの神童は、二三年してやうやく邪道におちた。いつしか太郎は、村のひとたちからなまけものといふ名前をつけられてゐた。惣助もさう言はれるのを仕方がないと思ひはじめたのである。太郎は六歳になつても七歳になつてもほかの子供たちのやうに野原や田圃や河原へ出て遊ぼうとはしなかつた。夏ならば、部屋の窓べりに頬杖ついて外の景色を眺めてゐた。冬ならば、爐邊に坐つて燃えあがる焚火の焰を眺めてゐた。なぞなぞが好きであつた。或る冬の夜、太郎は爐邊に行儀わるく寝そべりながら、かたはらの惣助の顔を薄目つかつて見あげ、ゆつくりした口調でなぞなぞを掛けた。水のなかにはひつても濡れないものはなんぢやろ。惣助は首を三度ほど振つて考へて、判らぬの、と答へた。太郎はものうさうに眼をかくとちてから教へた。影ぢやがなう。惣助はいよいよ太郎をいまいましく思ひはじめた。これは馬鹿ではないか。阿呆なのになぢがひない。村のひとたちの言ふやうに、やつぱしただのなまけものぢやつたわ。

太郎が十歳になつたとしの秋、村は大洪水に襲はれた。村の北端をゆるゆると流れてゐた三間ほどの幅の神棚木川が、ひとつき續いた雨のために怒りだしたのである。水源の濁り水は大渦小渦を巻きながらそろそろふくれあがつて六本の支流を合せてたちまち太り、身を躍らせて山を韋駄天ばしりに駆け下りみちみち何百本もの材木をかつさらひ川岸の樫や榎や白楊の太木を根こそぎ抜き取り押し流し、麓の淵で澱んで澱んでそれから一舉に村の橋に突きあたつて平氣でそれをぶちこはし土手を破つて大海のやうにひろがり、家々の土臺石を舐め豚を泳がせ刈りとつたばかりの一萬にあまる稻坊主を浮かせてだぶりだぶりと浪打つた。それから五日目に雨がやんで、十日目にやうやく水がひきはじめ、

二十日目ころには神棚木川は三間ほどの幅で村の北端をゆるゆると流れてゐた。

村のひとたちは毎夜毎夜あちこちの家にひとかたまりづつになつて相談し合つた。相談の結論はいつも同じであつた。おらは餓ゑ死したくねえちや。その結論はいつも相談の出発點になつた。村のひとたちは翌る夜また同じ相談をはじめなければいけなかつた。さうしてまたまた餓ゑ死したくねえといふ結論を得て散會した。翌る夜は更に相談をし合つた。さうして結論は同じであつた。相談は果つるところなかつたのである。村が亂れて義民があらはれた。十歳の太郎が或る日、兩腕で頭をかかへこみ溜息をついてゐる父親の惣助にむかつて、意見を述べた。これは簡単に解決がつくと思ふ。お城へ行つてぢきぢき殿様へ救済をお願ひすればいいのぢや。おれが行く。惣助は、やあ、と突拍子もない歡聲をあげた。それからすぐ、これはかるはずみなことをしたと氣づいたらしく一旦ほどきかけた兩手をまた頭のうしろに組み合せてしかめつらをして見せた。お前は子供だからさう簡単に考へるけれども、大人はさうは考へない。直訴はまかりまちがへば命とりぢや。めつさうもないこと。やめろ。やめろ。その夜、太郎はふところ手してぶらつと外へ出て、そのまますたすと御城下町へ急いだ。誰も知らなかつた。

直訴は成功した。太郎の運がよかつたからである。命をとられなかつたばかりかごほうびをさへ貰つた。ときの殿様が法律をきれいに忘れてゐたからでもあらう。村はおかげで全滅をのがれ、あくる年からまたうるほひはじめたのである。

村のひとたちは、それでも二三年のあひだは太郎をほめてゐた。二三年がすぎると忘れてしまつた。庄屋の阿呆様とは太郎の名前であつた。太郎は毎日のやうに藏の中にはひつて惣助の藏書を手當り次第に讀んでゐた。ときどき怪しからぬ繪本を見つけた。それでも平氣な顔して讀んでいつた。

そのうちに仙術の本を見つけたのである。これを最も熱心に讀みふけた。縦横十文字に讀みふけ

つた。藏の中で一年ほども修行して、やうやく鼠と鷺と蛇になる法を覚えこんだ。鼠になつて藏の中をかけめぐり、ときどき立ちどまつてちゆうちゆうと鳴いてみた。鷺になつて、藏の窓から翼をひろげて飛びあがり、心ゆくまで大空を逍遙した。蛇になつて、藏の床下にしのびり蜘蛛の巣をさけながら、ひやひやした日蔭の草を腹のうろこで踏みわけ踏みわけして歩いてみた。ほどなく、かまきりになる法をも體得したけれど、これはただその姿になるだけのことであつて、べつだん面白くもなるともなかつた。

惣助はもはやわが子に絶望してゐた。それでも負け惜みしかう母者人に告げたのである。な、餘りできすぎたのぢやよ。太郎は十六歳で戀をした。相手は隣りの油屋の娘で、笛を吹くのが上手であつた。太郎は藏の中で鼠や蛇のすがたをしたままその笛の音を聞くことを好んだ。あはれ、あの娘に惚れられたいものぢや。津輕いちばんのよい男になりたいものぢや。太郎はおのれの仙術でもつて、よい男になるやうになるやうに念じはじめた。十日目にその念願を成就することができたのである。

太郎は鏡の中をおそるおそる覗いてみて、おどろいた。色が抜けるやうに白く、頬はしもぶくれでもち肌であつた。眼はあくまでも細く、口鬚がたたりと生えてゐた。天平時代の佛像の顔であつて、しかも股間の逸物まで古風にだらりとふやけてゐたのである。太郎は落膽した。仙術の本が古すぎたのであつた。天平のころの本であつたのである。このやうな有様では詮ないことぢや。やり直さう。ふたたび法のよりをもどさうとしたのだが駄目であつた。おのれひとりの慾望から好き勝手な法を行つた場合には、よかれあしかれ身體にくつついてしまつて、どうしやうもなくなるものだ。太郎は三日も四日も空しい努力をして五日目にあきらめた。このやうな古風な顔では、どうせ女には好かれまいが、けれども世の中には物好きが居らぬものでもあるまい。仙術の法力を失つた太郎は、しもぶくれの顔に口鬚をたたりと生やしたままで藏から出て來た。

あいた口のふさがらずにゐる兩親へ一ぶしじゆうの譯をあかし、やうやく納得させてその口を閉ぢさせた。このやうなあさましい姿では所詮、村にも居られませぬ。旅に出ます。さう書き置きをしたためて、その夜、飄然と家を出た。満月が浮んでゐた。満月の輪廓は少しにじんでゐた。空模様のせりではなかつた。太郎の眼のせりであつた。ふらりふらり歩きながら太郎は美男といふものの不思議を考へた。むかしむかしのよい男が、どうしていまでは間抜けてゐるのだらう。そんな筈はないのぢやがなう。これはこれでよいのぢやないか。けれどもこのなぞなぞはむづかしく、隣村の森を通り抜けても御城下町へたどりついて、また津輕の國さかひを過ぎててもなかなか解決がつかないのであつた。

ちなみに太郎の仙術の奥義は、懷手して柱か塀によりかかりぼんやり立つたままで、面白くない、面白くない、面白くない、面白くないといふ呪文を何十べん何百べんとなくくりかへしくりかへし低音でとなへ、つひに無我の境地にはひりこむことにあつたといふ。

喧嘩次郎兵衛

むかし東海道三島の宿に、鹿間屋逸平といふ男がゐた。曾祖父の代より酒の醸造をもつて業としてゐた。酒はその醸造主のひとつがらを映すものと言はれてゐる。鹿間屋の酒はあくまでも澄み、しかもなかなか辛口であつた。酒の名は、水車みづぐるまと呼ばれた。子供が十四人あつた。男の子が六人。女の子が八人。長男は世事に鈍く、したがつて逸平の指圖どほりに商賣を第一として生きてゐた。おのれの思想に自信がなく、それでもときどきは父親にむかつて何か意見を言ひだすことがあつたけれども、言葉のなかばでもうはや丸つきり自信を失ひ、さうかとも思はれますが、しかしこれとても間違ひだ

らけであると思はれませんし、きつと間違つてゐると思ひますが父上はどうお考へでせうか、なんだか間違つてゐるやうでございます、とやはり言ひにくさうにその意見を打ち消すのであつた。逸平は簡単に答へる。間違つとるぢや。

けれども次男の次郎兵衛となると少し様子がちがつてゐた。彼の氣質の中には政治家の泣き言の意味でない本来の意味の是々非々の態度を示さうとする傾向があつた。それがために彼は三島の宿のひとたちから、ならずもの、と呼ばれて不潔がられてゐた。次郎兵衛は商人根性といふものをきらつた。世の中はそろばんでない。價のないものこそ貴いのだ、と確信して毎日のやうに酒を呑んだ。酒を呑むにしても、不當の利益をむさぼつてゐるのをこの眼でたしかにいままで見て來た彼の家の酒を口にすることは御免であつた。もしあやまつて呑みくだした場合にはすぐさま喉へ手をつつこみ無理にもそれを吐きだした。來る日も來る日も次郎兵衛は三島のまちをひとりして呑みあるいてゐたのであつたが、父親の逸平は別段それをとがめだてしようとしなかつた。頭の澄んだ男であつたからである。あまたの子供のなかにひとりくらゐの馬鹿がゐたはうが、かへつて生彩があつてよいと思つてゐた。それに逸平は三島の火消しの頭かちをつとめてゐたので、ゆくゆくは次郎兵衛にこの名譽職をゆづつてやらうといふくらみもあり、次郎兵衛がこれからますます馬のやうに暴れまはつてくれたならそれだけ將來の火消し頭としての資格もそなはつて來ることだといふ遠い見透しから、次郎兵衛の放埒を見て見ぬふりをしてやつたわけであつた。

次郎兵衛は、二十二歳の夏にぜひと喧嘩の上手になつてやらうと決心したのであつたが、それはこんな譯からであつた。

三島大社では毎年、八月の十五日にお祭りがあり、宿場のひとたちは勿論、沼津の漁村や伊豆の山々から何萬といふひとがてんでに團扇を腰にはさみ大社さしてぞろぞろ集つて來るのであつた。三

島大社のお祭りの日には、きつと雨が降るとむかしのむかしからきまつてゐた。三島のひとたちは派手好きであるから、その雨の中で團扇を使ひ、踊屋臺がとほり山車がとほり花火があがるのを、びつしより濡れて寒いのを堪へながら見物するのである。

次郎兵衛が二十二歳のときのお祭りの日は、珍らしく晴れてゐた。青空には鳶が一羽びよろびよろ鳴きながら舞つてゐて、参詣のひとたちは大社様を拜んでからそのつぎに青空と鳶を拜んだ。ひる少しすぎたころ、だしぬけに黒雲が東北の空の隅からむくむくあらはれ二三次またたいてゐるうちにもうはや三島は薄暗くなつてしまひ、水氣をふくんだ重たい風が地を這ひまはるとそれが合圖とみえて大粒の水滴が天からぼたぼたこぼれ落ち、やがてこらへかねたかひと思ひに大雨となつた。次郎兵衛は大社の大鳥居のまへの居酒屋で酒を呑みながら、外の雨脚と小走りに走つて通る様子の女の姿を眺めてゐた。そのうちにふと腰を浮かしかけたのである。知人を見つけたからであつた。彼の家のおむかひに住まつてゐる習字のお師匠の娘であつた。赤い花模様の重たげな着物を着て五六歩はしつてはまたあるき五六歩はしつてはまたあるきしてゐた。次郎兵衛は居酒屋ののれんをばつとはじいて外へ出て、傘をお持ちなさい、と言葉をかけた。着物が濡れると大變です。娘は立ちどまつて細い頸をゆつくりねぢ曲げ、次郎兵衛の姿を見るとやはらかいまつ白な頬をあからめた。お待ち。さう言ひ置いて次郎兵衛は居酒屋へ引返して亭主を大聲で叱りつけながら番傘を一ぱん借りたのである。やいお師匠さんの娘。おまへの親爺にしろおふくろにしろ、またおまへにしろ、おれをならずものの呑んだくれのわるいわるい惡者と思つてゐるにちがひない。ところがどうぢや。おれはあゝ氣の毒なと思つたならかうして傘でもなんでもめんだうしてやるほどの男なのだ。ざまを見ろ。ふたたびのれんをはじいて外へ出てみると、娘はゐなくていつそうさかな雨脚と、押し合ひへし合ひしながら走つて通るひとの流れとだけであつた。よう、よう、よう、ようと居酒屋のなから嘲弄の聲が聞えた。六七人